

日本公論

平成十六年七月七日第二種
郵便物不認可
平成十六年八月十五日発行
第一号

特集 日本はアメリカから独立するべきか

<座談会・論文>

マスコミ就職読本ライブ報告・自衛隊見学

英国・愛国留学体験記

創刊号

連載企画：我が心の師（山本 透先生）

平成16年8月



日本大学法学部 福田充研究室

『日本公論』創刊の辞

福田 充

近代明治維新以降の日本のジャーナリズムを組解いたとき、植木枝盛が発した演説が、三宅雪嶺が発した記事が、吉野作造が発した思想が、桐生悠々が発した言論が、ベンの力を媒体として公の言葉をつむいできたことが確認される。ベンの力は言葉の力であり、雑誌の力である。公論はこの不断の努力の上に成り立ち、ジャーナリズムはこの営みを支える生業である。現代において、理想を追求する若者が、この営みを引き継ぐ役割をになうことは、いかにして可能なのであるか。この問を繰り返し問い続けるために、『日本公論』をここに創刊する。『日本公論』とは、日本大学の学生が放つ公の言葉という意味であり、当然、日本人の公論、日本の公論という意味でもある。日本大学法学部福田充ゼミナールの学生を中心に、現代社会の状況を、世界情勢を、時勢を追究しながら、それぞれの理想に向かって邁進する学生の視点から世界を照射する。その言論の場が『日本公論』である。

創刊号の特集は「日本はアメリカから独立すべきか」である。このタイトルには、「日本はアメリカから独立していない」という前提が含まれている。果たして日本は主体的にその政治・経済・文化・生活を運営できる独立国家なのであるか。独立とは何か。孤立、自立とはどういう状態を意味するのか。人が独立する、国家が独立するということの意義はどこにあるのだろうか。日本が太平洋戦争でアメリカ合衆国に敗北し、独立国家としての歩みを止めたとき以来、日本と日本人は、政治において、外交において、経済において、教育において、宗教において、軍事において、文化において、ことごとくこの問題に直面してきた。常にアメリカという超大国の壁にぶつかりながら、向かい合いながら生きてきた日本にとって、日本人にとって、この問題は避けて通れない本質的な問題であり続ける。現代の世界はどうあるべきか、現代の社会はどうあるべきか、この問いを立てるひとつのバースペクティブとして、「日本はアメリカから独立すべきか」という問いから『日本公論』をスタートさせる。

この『日本公論』での発言者と、この雑誌の読者との間のコミュニケーションにおいて、これからの世界が、これからの日本がつむがれていくことを期待する。

〈特集〉座談会

日本はアメリカから独立するべきか

自衛隊を「戦地」イラクへ派遣した日本。
日本国はそのまま米国の飼い犬として生きるべきなのか……。様々な視点から考察する。

論文

独立国日本 川島 紘一／中国中心のアジア共同体設立で独立せよ 黒沢 豊／忠犬日本のがれ 大沼 智彦

敗戦国日本の戦勝国アメリカに対する遠慮外交 杉山 結佳／日本がアメリカから独立できない原因は何か 高倉 美緒

アメリカだけに目を向けている日本を変えるには 田中 睦子／アメリカからの独立 鶴岡 将智

アメリカ依存から日本のための独立 宗近 真由美／イラク戦時下のアメリカメディアの大罪 吉田 茜

緊急特別寄稿

日本人解放当日の夜

川島 紘一

四三

〈ルポルタージュ〉
自衛隊体験記

自衛隊取材班

四五

イラクに派遣されて以来、議論され続けている自衛隊。その必要性について潜入取材を試みる。

マスコミ就職読本ライブ報告

五一

メディアの現場は今……。新聞業界・出版業界・音楽業界・映画業界の実態に触れる。

留学体験記

六四

川島 紘一・黒沢 豊

川島はアイルランドへ、黒沢はイギリスへ。それぞれ見知らぬ土地で何を学び、何を感じたのか。

連載企画（第一回）

我が心の師

（元上智大学教授 山本 透先生）

福田 充

七二

編集後記

七五